

よその春

土田龍太郎

春ここの櫻花、咲くを待ち散るを惜むは世のならひなれど、はかなくて過ぎにしわが春を數ふるに、盛りの花に心ときめきせられしはまれがちにて、かへりてなにとやらむうき思ひのきざせることさへなきにしもあらざりしは、おのがことながらうたてあやしきこといふはかりなし。

ここにたれとも知れぬ若をみなき女のわが前に向ひるたらむに、そのかほかたちあてにうるはしければ、

いかでねもごろになれむつびてしがなとて、かれこれもの言ひかくれども、なほざりのいらへだにはかばかしからず、おほかたはよそ目がちにて、うちとけむにもさらに手だてとてなければ、ただはしたなきままにうち止みなむとせば、ほいなくすさまじきことたとへむにものなからまし。

春ここの花をかかるとれなき女になぞふるは、櫻をひたぶるにめでてやまぬなべての世の人にはげに思ひのほかなるべけれども、同じ花、われにはなほあだし男に媚ぶるがによそほひつくるへる女にたぐひて見ゆれば、そのうるはしさなべてならねばこそ、いとどくやしき思ひのみつりていかむともせむすべなきににたれ。

さるは、櫻ははやくうつろひて日月経て後、時至りておのづから目とまる道のべの山吹かきふもしくは垣生なでしこの撫子、そのけしききよらにうたきがなかに、まめやかにつつましげなるけはひさへそひたれば、かへりていとどなつかしく、しばしがほど去りがてにするぞをかしき。

吹く風にさそはれてかつうつろふ櫻花にいさぎよきもののふを譬ふるは上つ世よりのならひなれども、われはそれにはひきかへて花の盛りをことしもあれ、なまめける女のつれなきに比べまほしくおぼゆるは、げにいとひがみたりとこそ言ひつべけれ。されば心あらむ人の誇り嘲りを招かざらむもはかりがたし。かかるねぢけがましき思ひのあながちにきざせるは、今を盛りに咲く花のあまり誇りかにて色香に驕れるにさへにたれば、かへりてうとまるる心ちのつりくるがゆゑにてもやあるらむ。

花に問へば花語ることありと曰ひて芭蕉翁の嵐雪に説けることわり、まことさもあら
むとはおぼゆるものから、性さがつたなきわが身、かかる風雅の奥かに入らむこととても望
むべきにあらじ。されば世の人の待ちがてにする年ごとの花の春なほわが春ならずとて
ひとりわびくしたるほかなきぞあいなき。

咲き匂ふ宿の櫻もよその春

(令和二年十月二十四日受附)